

『おもてなしサバイバー』

【登場人物】

村瀬ヒヨ (18) 主人公 おもてなし専門学校 旅館・ホテルコース 1年
岡崎涼馬 (18) ヒヨの彼氏 大学 1年

吉田千和 (35) カフェ「skyrocket」店員

倉本正也 (35) カフェ「skyrocket」コック

垣内ハル (25) カフェ「skyrocket」店長

秋月誠 (25) 垣内ハルの彼氏 (幽霊)

村瀬隆史 (45) ヒヨの父

村瀬遥 (40) ヒヨの母

村瀬健水 (17) ヒヨの弟

「東京おもてなし専門学校」

五十嵐友蔵 (50) 学校長

古場アキ (33) 旅館・ホテルコース講師

小口おさむ (36) 旅館・ホテルコース講師アシスタント

戸倉ユカ (18) ヒヨの同級生 旅館・ホテルコース 1年

水野アイ (18) ヒヨの同級生 旅館・ホテルコース 1年

佐々木彩華 (19) ヒヨの先輩 レストラン・カフェコース 2年

志村すず (19) ヒヨの先輩 テーマパークスタッフコース 2年

黒部ユリ (19) ヒヨの先輩 旅館・ホテルコース 2年

瀬島力ナ (18) ヒヨの同級生

保護者 A

記者 A

記者 B

1年 A

1年 B

1年 C

2年 A

2年 B

2年 C

2年 D

2年 E

カフェ「skyrocket」 客 A

カフェ「skyrocket」 客 B 《イメージ…海原やすよ》

鉄板焼き屋「村瀬」 客

【ドラマ脚本】

○東京都中央区晴海地区

上空より、晴海地区全景が見える。

T・平成27年4月・東京・晴海

映像はジェットコースターのように一気に空から地上へ降り、晴海大橋、晴海客船ターミナル、晴海アイランドトリトンスクエアなど晴海の景色を駆け巡り、再び上空へ舞い上がる。

そして、猛スピードでもてなし専門学校をめがけて地上へ向かい、中庭の桜の花びらが舞う中に飛び込む。

女の子3人のシルエット。はつきりとは見えないが、楽しそうな笑い声。

そこへ秋月誠(25)の声が鳴る。

誠(N)「ハル……。桜の中に、あの頃の君に似た笑顔を見たんだ」

風の音と共に再び一面桜の花びらの舞いに包まれる。

○カフェ「skyrocket」・客席

桜の花びらが風で一気に吹き飛ぶとそこはカフェの中。

T・平成27年2月

テーブルが4、5個。満席。

一番奥の席に、村瀬ヒヨ(18)と岡崎涼馬(18)、高校の制服姿で食事中。

涼馬「ヒヨ、そのドリァ、一口ちょうだい」

ヒヨ「いいよ。熱いから気をつけて」

ヒヨ、スプーンに取りフーフーして涼馬の口に入れてあげる。

涼馬「うまっ」

微笑むヒヨの口元にご飯粒がついているのを涼馬が指で拭う。

他の席の客、美男美女のヒヨと涼馬の姿に見とれる。

店内には、カフェ店員・吉田千和(35)と店長の垣内ハル(25)が微笑みを浮かべながらゆったりとした余裕の動きで席を巡回している。

○同・入口付近

二人の太った女性客A、Bが大阪弁で喋りながら入ってくる。

ハル、笑顔で案内。

○同・厨房

ホールと厨房を隔てる扉。

扉には小窓が付いていてホールの様子が覗える。

扉の厨房側には“防音”の文字。

ハルが厨房に向かい歩いてくるのが小窓から見える。ハル、営業スマイルがみるみるうちに悲壮な顔に変わり、扉を入った瞬間、慌たらしい音に包まれ。

ハル「また来たよー、新規！まーくん、3番テーブル2名様、Bランチ2つ！」

いくつもの料理を同時に作っているコック・倉本正也(35)。包丁の音、フライパ

ンがコンロに当たる音など。

倉本「了解！」

千和「厨房へ険しい表情で入って来る。」

千和「まーくん、5番テーブルのお客様まもなくデザートお願いします！」

倉本「了解！これ3番テーブルのサラダ」

ハル「はい」

ハル、サラダをトレイに乗せ、ホールに向かって扉を出る瞬間、完璧な笑顔になる。

倉本「千和ちゃんこれ5番テーブルね！」

とデザートチーズケーキを出す倉本、千和の顔を怪訝に見て。

倉本「顔、気をつけて」

千和「任せて。余裕よ」

千和、ホールに向かって扉を出る瞬間、完璧な笑顔になる。

○同・厨房

奥にかがんでいたハルが突如、両手に火が付いた手持ち花火を数本持って軽くパニツク。厨房内を右往左往して。

ハル「うーわ付いちゃったよ！わ、え、どうしょ、どうするこれ？うわっ、これちょっとどうしょ、まーくん！うわ！あっっ！」

倉本、料理から手が離せず。

倉本「店長！忙しいのに何やってんだよ！ちょっと！危ないなーもう！」

そこへトレイを持った千和が慌ただしくホールから来て。

千和「わあ、何！何なのこの騒ぎは！」

ハル、花火を持ったまま千和に近づく。

ハル「ね、ね、千和ちゃん助けて！」

千和「やだ、こっちこないですよ！」

千和、トレイで応戦。

ハル「千和ちゃん」

千和、キレル。

千和「…店長！そもそもなんでここで花火なんかしてんのよ！」

ハル、火の付いた花火を持ったまま。

ハル「パースデーケーキの準備を…」

千和、ハルの言葉に食い気味で。

千和「早いよ！まだ熱々ドリア食ってるわ」

ハル「夏に買った花火だったから、ちゃんと付くか試そうと…」

千和、ハルの言葉に食い気味で。

千和「外でしろよ外で！」

倉本、料理の手を止めずに。

倉本「しかもケーキに付ける花火って線香花火じゃないの！？」

千和「アンタそれ何持ってんの！？」

ハル「爆裂スパークピカピカドッカーン」

千和、ハルの言葉に食い気味で。

千和「絶対わざとだろ！」

火花が消える。

ハル「あ！消えた！火花は大丈夫だね！」

千和、鬼の形相で。

千和「何が“火花は大丈夫だね”よ、こっちは全然大丈夫じゃない！ランチタイム！ここは戦場！まだ戦いは終わってないよ！」

ハル「は、はいー！！！」

千和、倉本が出す料理をトレイに乗せ、ハルを睨みつけてホールへ向かい、ホールに出る瞬間に鬼の形相から接客スマイルに早変わり。

○同・客席

千和、微笑みを浮かべフロアを静かに歩いている。

レジカウンターでお帰りのお客様に対応するハル。先ほどの騒ぎを微塵も感じさせない落ち着きぶり。

客AとB、美男美女のヒヨと涼馬に見とれて小声で。

客A「理想のカップルやなあ」

客B「憧れるわ〜」

客A、声が普通の大きさになり。

客A「あれ？アンタそのサラダ食べへんの？野菜から食べた方が太りにくいらしいで。それ以上太ったらヤバイやろ！」

客Bも普通の大きさの声で。

客B「うるさいなあ、生野菜が苦手やねん」

客A「じゃあそれ、もらっついていい？」

客B「ええで」

ヒヨと涼馬、声につられて客A、Bに目がいく。

客A、Bの横を通り、千和、ヒヨのテーブルへ。空いた器を下げながら。

千和「いつも仲良しね」

涼馬、テーブルにあるメニューを指して。

涼馬「千和さん、この今日のデザートって」

千和「今日はチーズケーキですけど、違うものをご用意させていただきましたね」

ヒヨ「すごい！チーズが苦手って覚えてくれたの？」

千和「はい。では後ほどお持ちします」

涼馬「ありがとう」

涼馬、去っていく千和の背中を見ながら呟くように。

涼馬「さすがカリスマ接客だな」

ヒヨ「カリスマ…？」

涼馬「ん？」

ヒヨ「ん？」

ヒヨと涼馬、「ん？」と言い合い笑う。

客A、B、それを見て。

客A「なんで“ん？”て言うてるだけであんなかわいいねん！」

客B「ん？ん？」

客A「黙れデブ」

○同・厨房

ハル、チョコケーキに夢中でデコレーションしているが、衝撃的に下手。

千和、ホールから素早く来て厨房の倉本に向かつて。

千和「まーくん！生野菜が苦手な方にサラダの代わりに何かできる？メインの前にお野菜を召し上がりたいそうなんだけど」

倉本「わかった、ちよっと待って」

千和「ありがと。…店長、今度は何をしているのかな？」

ハル、得意げに。

ハル「ケーキにデコレーションしてるの」

倉本、まず千和に野菜スープを出して。

倉本「千和ちゃんこれ。CランチのオニオンスープにAランチの野菜を足した具たくさん

野菜スープ」

千和「ありがと助かった！」

倉本、〈happy birthday!〉とデコレーションしたチョコケーキを出して。

倉本「店長、それはお客さんに出せないからこっちでお願いします」

ハル「えー、せつかくかわいくできたのにい。見てよ千和ちゃん」

千和、野菜スープを運びながら。

千和「店長、それは私たちが後でいただくので、まーくんが作ったケーキに花火、準備しておいて。火はまだつけないですよ！？」

千和、ハルのケーキを一瞬見て短くため息をついて出ていく。

ハル、倉本に。

ハル「え！かわいく出来てるよね！？」

倉本、ハルのケーキを見るが無言。

○同・客席

千和、客Bにスープを出し、客A、Bとも驚き喜んでいる。

ヒヨと涼馬もその様子を見ている。

千和、ヒヨの席に器を下げて来て。

千和「この後、デザートをご用意しますね」

ヒヨ「千和さんすごい！サラダが一瞬でスープになったね」

千和「偶然お客様のお話が聞こえて、シェフが対応してくれたので」

涼馬「さすがです」

千和「ありがとうございます」

千和、涼馬とアイコンタクトして去る。

ヒヨ「え？なにになに？」

涼馬「何でもないよ。それよりヒヨ…」

涼馬、鞆からプレゼントを出して。

涼馬「これしか用意できなくて…」

涼馬、ヒヨにプレゼントを出す。

涼馬「誕生日、おめでとう」

ヒヨ、驚いて。

ヒヨ「え！？用意してくれてたの？だって涼馬、最近受験勉強が忙しくてバイトにも行けないし、今年は用意できないって…」

涼馬「うん。でも全然たいしたものじゃないんだ」

ヒヨ「涼馬からのプレゼントなら何でも嬉しいよ。ありがとう」

ヒヨ、受け取って。

ヒヨ「開けてもいい？」

涼馬「うん」

その様子を見て、千和は素早く店の奥に消える。

次の瞬間、店内の照明が消え、BGMが変わる。

奥から線香花火が付いたチヨコレートケーキを持った千和と、顔にクリームやチヨコがついたまま小さな花束を持ったハルが出て来て、ハッピーバースデーを歌いながらヒヨのテーブルへ。

感動するヒヨ。

拍手に包まれる店内。みんな笑顔。

T・『おもてなしサバイバー #1』

○晴海地区・海沿い（夕方）

ヒヨと涼馬、自転車に2人乗り。ヒヨのリュックには涼馬からもらった誕生日プレゼント、晴海のゆるキャラ“はるみん”の、胸元に五輪のマークが入ったマスクotteが揺れる。

ヒヨ「晴海のゆるキャラはるみん、超かわいいよね、ずっと欲しかったんだ」

涼馬「オリンピックバージョン、人気らしくて見つけるの結構苦労したんだぞ」

ヒヨ「そうなんだ！ラッキー！あと私、あのカフェも大好き！」

涼馬「skyrocket？」

ヒヨ「うん。みんな温かいし、サプライズも超感動！ありがとね」

涼馬「おう」

○晴海ふ頭公園

看板が立てられていて、2020年東京オリンピックピックに伴い、東京湾大華火祭が来年で以降行われないことが示されている。

T・平成27年3月

ヒヨと涼馬、自転車を止めて並んで座り、海を見ている。

制服の胸ポケットに花。自転車のかごには卒業証書が2つ。

ヒヨ「あつという間だったな。高校3年間」

涼馬「卒業かー。なんかまだ実感ないな」

ヒヨ「去年の花火、きれいだったね！」

涼馬「うん」

ヒヨ「今年も見れるといいね」

涼馬「オリンピック最後の花火だもんね」

ヒヨ「涼馬はその頃は大学生かあ。頑張って体育の先生になる夢、叶えてね」

涼馬「ヒヨはお父さんの店手伝うの？」

ヒヨ「うん。とりあえずね。特にやりたいこともないし」

涼馬「お父さんのお好み焼き最高じゃん。ヒヨが上手く作れるようになったら俺に一番に

食べさせて」

ヒヨ「うん！でも…これでいいのかな」

涼馬「何が？」

ヒヨ「だって、涼馬は大学生になって、日本は5年後に東京オリンピック。この晴海の街

も人も、今からどんどん変わっていくんだよ。でも私は…」

涼馬「どうしたんだよ、珍しく弱気じゃん」

ヒヨ「なんか、卒業したら急に焦っちゃって。私の将来の夢って何だろうって」

涼馬「無理に見つけなくてもいいんじゃない？そのうちわかるって。俺の夢もヒヨが気づ

かせてくれたようなもんじゃん」

ヒヨ「え？」

涼馬「覚えてないの？俺がスポーツか勉強、どっちを選ぼうか迷って時、ヒヨが言ってく

れたんだよ、体育の先生ならどっちも選べるんじゃない？って」

ヒヨ「そうだった！だって涼馬、後輩に教えるの超上手いし、涼馬みたいな先生だったら

みんな嬉しいだろうなって」

涼馬「イケメンだしなー。女子から超モテるんだろうなあ」

ヒヨ「そうは言ってませんけど」

涼馬「（笑）。*sky on the*の千和さんのことも、ヒヨずっと褒めてたじゃん」

ヒヨ「あの人はおもてなしのプロだね」

涼馬「ヒヨのそうやってすぐ人の良い所みつけて褒める所、俺、大好きだよ。案外、もう

見つかってるんじゃない？ヒヨの夢も」

ヒヨ「…何、急に。あ！いまチュウしようと思ったでしょ！いい雰囲気にしてチュウしよ

うと思っただんでしょー！」

涼馬「違うよバカ！」

ヒヨ「あ、照れてる！」

2人、戯れる。

○ヒヨの家「鉄板焼き・村瀬」・中

ヒヨの父・村瀬隆史（45）、お好み焼きを焼いている。ヒヨの母・村瀬遥（40）も

店を手伝っている。

店内には数人の客。

ヒヨと涼馬、席についてお好み焼きを食べている。

遥「涼ちゃんいつもありがとねえ、送ってきてくれて。ヒヨ、重いでしょ？」

涼馬「いえ、大丈夫です。こちらこそいつもご馳走様です」

遥「あらいいのよお。いっぱい食べてね」

涼馬「ありがとございます」

隆史「粉もんばかり食うてたら太るでえ」

遥「粉もん屋がそれ言っちゃダメでしょ。でもここにいるとついつい食べちゃうのよねー、おいしくて」

涼馬「本当に、お父さんのお好み焼きは最高です」

隆史「お、嬉しいこと言うてくれるやん涼馬。大学生になっても食いに来てや」

涼馬「はい！」

涼馬、お好み焼きを頼張る。

客の1人が箸を落とすが、誰も気づかず。ヒヨだけが気づき素早く店の奥へ。

客「すいませーん」

遥、振り返り。

遥「はーい…」

と言うのと同時にヒヨが。

ヒヨ「どうぞ」

と笑顔で新しい箸を渡す。

客「気づいてくれたの？ありがと」

ヒヨ、笑顔で会釈し客の席を何気なく見渡して去る。

ヒヨ、自分の席に戻りながら遥に小声で。

ヒヨ「あのお客さん、あと何か頼んでるの？」

遥「えーっとねえ、あとは海鮮焼きそばかな」

ヒヨ「鉄板熱くなり過ぎてるから弱めた方がいいよ。あとビールなくなりそうだったから追加聞いてあげて」

遥「さすがヒヨ！ありがと！」

遥、すぐに客の席へ行き、鉄板を調節しながら飲み物を聞く。

ヒヨ、席に着くと店のテレビに「東京おもてなし専門学校」のCMが流れ、画面には在校生が3人が宣伝している。

ヒヨ、テレビにくぎ付けになり。

ヒヨ「あ！彩華ちゃんだ！かわいーなー」

涼馬「アイドルみたいだよな」

ヒヨ「この学校に入ったら彩華ちゃんに毎日会えるのかなあ」

涼馬「競争率も学費もバカ高そうだけどな」

ヒヨ「あー。隣のクラスの子も試験ダメだったって聞いた。宣伝も凄いやね、このCM、1日に何度も見るし」

涼馬「そういえばsky rocketの千和さんってこの学校の卒業生だよな」

ヒヨ「え？そうなの！？知らなかった！」

涼馬「ヒヨのサプライズベースデーの相談に行った時にちらっと聞いたんだよ」

ヒヨ「へー！そうだsky rocket行こうよ！学校の事、千和さんに詳しく聞きたい！」

涼馬「そうだな、高校も卒業したし、これ食べたなら挨拶にでも行くか！」

ヒヨ「うん！」

2人、お好み焼きを食べる。

ヒヨと涼馬の様子を見ている遥と隆史。

隆史「行かせてやりたいけどなあ。俺の稼ぎやったら厳しいわ」

遥「ヒヨは大丈夫。きつとわかってくれるだろうし、そんな学校行かなくてもあの子は十分おもてなしできてるわよ」

隆史「…そうやな」

○「東京おもてなし専門学校」・正面

入学式の看板が立っている。

T・平成27年4月

スーツ姿のひよ。

ヒヨ「…来ちゃった！」

ヒヨ、よし！と気合を入れて門をくぐる。

○同・入学式場

ホール中央に約100人の新入生が座っている。

サイドに講師群、在校生代表が数人。

ステージ中央で学校長・五十嵐友蔵(50)が挨拶をしている。

カメラマンが1人、その様子を撮影している。

五十嵐「みなさん、ご入学おめでとうございます。わが校はおもてなしのプロを育て、就職率トップクラスの実績を持っています。5年後のオリンピックで世界中からいらっしやるお客様を、私達の素晴らしいおもてなしでお迎えいたしましょう」

拍手の後、場内アナウンスが流れる。

アナウンス「次は、在校生代表の挨拶です」

壇上に佐々木彩華(26)、志村すず(19)、黒部ユリ(16)が上がると、会場がざわめき、カメラマンが増える。

彩華、1歩前に出てマイクに向かい。

彩華「私は、お客様の笑顔が大好きです。これから、一緒に頑張りましょう」と、笑顔を見せる。

ヒヨ、憧れの眼差しで見とれる。

○同・入学式場前

彩華を取材陣が囲む。記者Aが彩華にマイクを向け。

記者A「成績トップの佐々木さんにとって、ライバルと成り得る人はいますか？」

彩華「新入生も同級生も、みんな大切な仲間です。お互いに助け合って頑張りたと思います」

彩華の笑顔にカメラのフラッシュの光が集中する。

志村すず（二〇）、彩華の後ろから割り込むように顔を出し。

すず「これから隣の会場で新入生歓迎パーティーを行います。宜しければ皆様もお越しください！ご案内いたします」

カメラのレンズがすずに向けられ、得意げに誘導していくすず。

○同・パーティー会場

広いパーティー会場の中は、大きく3つのエリアに分かれている。

それぞれコース別に、彩華率いる【レストラン・カフェコース】、すず率いる【テーマパークスタッフコース】、そしてユリ率いる【旅館・ホテルコース】。

○同【旅館・ホテルコース】エリア

食事ができる椅子とテーブルが設置されている。

着物姿のユリや他の2年生。

ユリだけ他とは区別された着物。

2年Aが着物の保護者Aに料理を出しながら。

2年A「こちらホタルイカの松前付でございます」

保護者A、首をかしげて。

保護者A「松前付？」

2年A「はい。ではごゆっくり」

と、すぐに去る。

保護者A「え…」

そこへユリが紙エプロンを持って来て。

ユリ「失礼いたします。よろしければこちらお使いくださいませ。松前付は北海道の郷土

料理で、昆布やスルメなどを混ぜ合わせたものでございます」

保護者A「あら、どうもありがとうございます！」

保護者A、満足げに食べ始める。

○同【テーマパークスタッフコース】エリア

新入生に交じり、幼い兄弟を連れた保護者が目立つ。

すずや同コース2年生たち、風船や綿菓子を子供に配っている。

新入生・瀬島カナ（二〇）が端の方に1人でうつむき加減にいる。

すず以外は、中心の賑やかな所にいる。

すず、カナの横に行き、綿菓子を差し出して笑顔で。

すず「大丈夫？」

カナ、突然のことに驚いて。

カナ「え、あ、はい」

すず「疲れちゃったのかな？」

カナ「いえ、なんだか、すごいなーって圧倒されちゃって」

すず「パーティーだもん、楽しまなきゃ」

と言って賑やかな輪の中に戻っていく。

それを見ながらカナ、ため息をついて。
カナ「はあ：私についていけるかなあ」
と立ち尽くす。

すると、輪の中に消えて行ったすがいつの間にかまた横にいる。手には小さな椅子と飲み物。

すが「はい、座って」

すが、カナを座らせ飲み物を渡し。

すが「無理に周りに合わせなくてもいいんだよ。ゆっくり自分のペースで楽しんでね」

カナ「あ、ありがとうございます！」

すが、ニコリと笑い、去っていく。

○同【レストラン・カフェコース】エリア

椅子とテーブルでカフェスペースができています。

ウエイトレス姿の彩華に注目が集まっている。彩華の行くテーブルごとに写真撮影が行われ、笑顔で答える彩華。

離れたテーブルに座っている記者Bがおしぼりで首の汗を拭き顔をゴシゴシ、水を一気に飲み干す。

○【レストラン・カフェコース】エリア・裏

カーテンで仕切られた裏側。2年生が2人、はメイクを直している。

2年B「あのオッサン見た？」

2年C「見た見た。最悪だよ、おしぼりで顔拭くなっつうの」

2年B「あのおしぼり絶対触りたくない」

2年C「あ、彩華お疲れ」

彩華「おつかれさま」

2年B「ね、彩華もメイク直しなよ。写真撮られまくって大変でしょ」

彩華「うん、後でね」

彩華、新しいおしぼりと水を持ってすぐ出て行く。記者Bのテーブルで新しいおしぼりを出し水を入れながら。

彩華「お仕事ご苦労様です。カメラ、重いのに大変ですね」

記者B「い、いやあ大丈夫だよ」

記者B照れる。

彩華「そちらのおしぼり頂いていきます」

記者B「あ、これはさっきつい顔を拭いてしまっ……」

と渡しずらそうにすると、彩華、トレイを脇に挟み両手で受け取り笑顔で。

彩華「ゆっくり休んでいってくださいね」
と去る。

○同・パーティー会場・出口付近

ヒヨ、自分のケータイ画面をスライドさせながらニヤニヤ。画面には、彩華、すが、

ユリとのそれぞれツーショットで撮ってもらった写真。

ヒヨ「トップ3、やっぱりかわいいな！」

会場にアナウンスが流れる。

アナウンス「本日は、入学式並びに新入生歓迎パーティーにお越しくださいます。誠にありがとうございます。間もなく終了とさせていただきますので、新入生のみなさんは必ずアンケートに希望コースを記入し提出して帰りましょう。来週月曜日の朝、掲示板にてクラスを発表いたします」

○同・パーティー会場・出口

続々とアンケート箱に用紙を入れて帰る新入生たち。

笑顔で見送る在校生たち。

○同・正面

学校の扉が閉まる。

○カフェ「skyrocket」・外観

扉に“close”の看板。

○同・客席

ヒヨと涼馬、私服でお茶している。

他にお客はいない。

千和、トレイにパンケーキを乗せてくる。

涼馬「休憩中なのにすみません」

千和「ううん、ちょうど良かった。これ試作品のパンケーキなの、食べてみて」

涼馬「うわ、うまそう！」

ヒヨ「千和さん聞いて！入学式から凄かったの！マスコミの人たちもいっぱいいたし、

佐々木彩華ちゃん、本物見ちゃった！あ！写真撮ってもらったの！見る！？」

涼馬、あきれた様子で。

涼馬「朝からずっとこの調子」

千和、微笑んで。

千和「ご入学おめでとうございます」

ヒヨ「ありがとうございます！みんな千和さんのおかげです！あの時、千和さんに話した

瞬間から私の人生は変わり始めたの…」

《以下、回想》

○回想・カフェ「skyrocket」・客席

制服姿のヒヨと涼馬、ちわが同じテーブルに座っている。千和、2人の制服胸ポケットの花を見て。

千和「二人とも卒業おめでとう」

涼馬「ありがとう。休憩中に来ちゃってごめんね」

千和「いいのよ、今日は落ち着いてるし」
ヒヨ「これ、うちのお好み焼き」

千和「美味しそう！いただいていいの？」

ヒヨ「うん！千和さん、誕生日の時は本当にありがとね。私このお店大好き！」

涼馬「俺も。大学友達もつれてくるよ」

千和「ありがと。2人の制服姿も見納めね」

ヒヨ、身を乗り出して。

ヒヨ「そうなの！もう卒業しちゃったの！千和さん！「東京おもてなし専門学校」ってどんなところ！？」

千和「え？何、急に」

涼馬「こいつ、その学校に興味あるって」

ヒヨ「千和さん卒業生なんでしょ？」

千和「そ、そうだけど」

ヒヨ「入るの難しい？」

千和「え！今から？もう試験も終わっちゃってるんじゃない？」

ヒヨ「やっぱそうだよね…」

ヒヨ、脱力して椅子に座る。

涼馬「ヒヨには店があるじゃん。おもてなしもできるし。なんで今さら学校なの？」

ヒヨ「できてないもん」

涼馬「え？」

ヒヨ「おもてなし、全然できてないよ」

涼馬「そんなことないよ。お母さんたちもお客さんもヒヨは良く気が付くっていつも褒めてるじゃん」

ヒヨ「もちろんそれは嬉しいよ。けど、なんか違う気がするの。もっと本格的に、ちゃんとしたおもてなしがしてみたい」

千和「ちゃんとしたおもてなしって？」

ヒヨ「今みたいに自己流じゃなくて、どこでも通用するような、プロになりたい」

千和「おもてなしのプロ？」

ヒヨ「そう、千和さんみたいに。簡単には無理だろうけど、夢がなかった私が、もしかしたら変われるかも知れないって思ったんだよね…今さらだけど」

ヒヨ、力なく笑う。

涼馬「ヒヨは十分プロだよ！俺が保証する！ヒヨがいる店なら俺、毎日行くから！」

ヒヨ「ありがと」

涼馬「元気出せって」

千和、2人をしばらく見て。

千和「…あの学校は…まるで別世界よ」

ヒヨ「え？」

千和「テレビのCMみたいな華やかな部分ばかりじゃないし」

ヒヨ「うん、陰で努力してるからあんなにキラキラ笑えるんだよね、きっと。うちもずっと商売してるからなんとなくわかる」

涼馬「ただのミーハーじゃなかったんだ」

千和「ヒヨちゃん、本気なんだね」

ヒヨ「ちよっと遅かったけどね」

千和「……遅くはないかも」

ヒヨ「え？どういこと？」

千和「ちよっと待ってて」

千和、店の奥に消える。

ヒヨと涼馬、顔を見合わせる。

すぐに、千和が青い紙を持って戻り、テーブルの上に置く。

ヒヨ「なにこれ？」

涼馬、それを読みながら。

涼馬「東京おもてなし専門学校、特別枠…推薦状…??」

千和「そう。通称“プラチナ推薦状”」

ヒヨ「それって…」

千和「ベスト3に選ばれた生徒が卒業時に贈られる、幻のチケット。卒業後、信頼と期待
のできる入学希望者に渡せば、その子は難関と言われる入試や面接が免除される」

ヒヨ、空いた口がふさがらずポカンとしている。涼馬、慌てた様子で。

涼馬「ちよ、ちよっと待って話がよくわからないんだけど!？」

千和「これがあれば、すぐにでも入学できるし、特にこのチケットは、プラチナの中でも
1年に1枚だけのブループラチナ。学費も免除されるわ」

涼馬「どういことだよ!？」

ヒヨがゆっくり立ち上がり。

ヒヨ「…千、和、さん?…千和…?…もしかして…う、う、宇佐美千和様?!？」

千和、ヒヨを見て微笑み、うなづく。

千和「今は結婚して苗字が変わったけど」

涼馬「宇佐美千和って誰だよ?」

と言った瞬間ヒヨが涼馬の頭を叩く。

ヒヨ「神だよ神!超有名じゃん!東京おもてなし専門学校、花の33期生!おもてなしラ
ンキング第1位、宇佐美千和様」

千和「大げさねえ」

千和、照れて笑う。

涼馬「ねえ」

と涼馬も笑う。睨む千和。黙る涼馬。

ヒヨ「あれ?でも噂では宇佐美千和さんって卒業後、確かイギリスの一流ホテルに…」

千和、冷静に。

千和「行ったわよ。でも、イギリスって霧が多いじゃない?私、霧アレルギーなのよ」

涼馬「霧アレルギーとか聞いたことないけど」

千和、冷静に。お茶を飲みつつ。

千和「そう?霧が出ると笑いが止まらなくなるの。何でも可笑しくなっちゃうのよ。とに
かく霧が出るとダメね。フッフ」

ヒヨ「なにそれ」

千和「あとあれよ、二階建バスあるでしょ？私…二階建バス恐怖症なの」

涼馬「はあ！？」

ヒヨ、涼馬の頭を叩き。

ヒヨ「神に失礼でしょ！」

千和「二階建バスって正面から見たら顔が2つあるみたいでしょ？それが道を走っていると私つい…、発狂しちゃうのよね」

ヒヨ「はあ！？」

涼馬、ヒヨを睨む。ヒヨ、咳払いして。

ヒヨ「それで帰ってきたの？」

千和「そうよ」

一同、無言でお茶を飲む。

《以上、回想終わり》

○カフェ「skyrocket」（客席）

ヒヨと涼馬、パンケーキを食べる。

千和、お茶を出しながら。

千和「それで？頑張れそう？」

ヒヨ「はい！！もう、全部が華やかで。私にもバラ色の人生が始まったって感じ！」

涼馬「大げさだなー」

ヒヨ「そんなことないよ！先輩たちはみんなめちやくちやも優しくて完璧で…」

千和「入学式まではみんなお客様扱いしてくれるからね」

ヒヨ「特にランキング上位の3人！」

千和「戦い抜いてきた“サバイバー”たちね」

ヒヨ「そうなの！…え？サバ？」

千和「ううん！何でもない。そうそう、サバね！明日のランチはサバサンドにしようかしら」

涼馬「それ絶対うまいやつじゃん！来る！」

ヒヨ「私も来る！」

3人、笑う。

○東京おもてなし専門学校・正面

授業初日。門をくぐるとすでに新入生がたくさん掲示板に群がっている。

コースが張り出されていて、ヒヨもなんとか割り込み、掲示板の前へ。

ヒヨ「私のコースは…」

○《回想》東京おもてなし専門学校

スーツ姿のヒヨ、新入生歓迎会にて希望コースを選択する用紙の、「レストラン・

カフェコース」の文字を大きく丸で囲む。

○東京おもてなし専門学校・掲示板の前

ヒヨ、「レストラン・カフェコース」の欄を入念に見るが。

ヒヨ「あれ？私の名前がない。おかしいな」

と、ふと「旅館・ホテルコース」を見るとヒヨの名前が。

ヒヨ「ん！？」

ヒヨ、目をこすり、もう一度見直す。

確かに「旅館・ホテルコース」にヒヨの名前。

ヒヨ「え！なんで！？…あ、ちょっとすみません！」

ヒヨ、通りかかった先生の袖をつかむ。

袖をつかまれた着物姿の「旅館・ホテルコース」講師・古場アキ(33)が振り返り。

アキ「何ですか？」

ヒヨ、つかんだ手を急いで離し。

ヒヨ「あ、すみません！あの、私、コースが違うみたいで」

アキ「え？」

ヒヨ「あの私、「レストラン・カフェコース」を希望したはずなんですけど、間違えて違

うコースになっちゃってるみたいで」

アキ、しばらくヒヨを見て。

アキ「あなた、お名前は？」

ヒヨ「失礼しました！村瀬ヒヨと申します」

アキ、細い目をしてヒヨを眺める。

すると、アキのアシスタント・小口おさむ(38)が高速すり足でアキの側に来て、

アキに耳打ちする。

小口「例の、プラチナの…」

アキ、ツンとした表情で。

アキ「ああ。村瀬さんね。あなたアンケート用紙、ちゃんと読みましたか？」

ヒヨ「え？あ、はい。確かに「レストラン・カフェコース」を選んで…」

アキ「丸で困んだ？」

ヒヨ「はい！」

アキ「そうね困んであったわね」

ヒヨ「ですよね！じゃあ…」

アキ、いきなり大きな声で。

アキ「小口！」

小口がアキにさっと紙を差し出す。それはアキの書いたアンケート用紙で。

アキ「村瀬さん」

ヒヨ、ちよつとビビッて。

ヒヨ「は、はい」

アキ「あなた、ちゃんと確認しないとダメですよ。ここ」

と、アンケートを見せる。

ヒヨ、見て。

ヒヨ「えっと…ど…ど…」

アキ「だからここ！」

と、指でアンケート用紙の端を指す。

すると、アンケート用紙の端の方に目立たない小さな文字。

ヒヨ、注意してそこを見て。

ヒヨ「え？字ちっちゃ！」

アキ、咳払い。ヒヨ、慌てて目を凝らして読む。

ヒヨ「希望のコースの番号に✓(チェック)マークを付けてください。記入方法が正しい場合は、特に希望はないものとし、学校の判断によってコースを決定させていただきます”…ええ！！”」

アキ、アンケート用紙を小口に返し。

アキ「そういうことですので、あなたは間違いなく「旅館・ホテルコース」のメンバーです。よろしくお願ひいたします」

ヒヨ「え————！！！」

○同【旅館・ホテルコース】教室・中

後ろの空いている席につくヒヨ。

ふと右隣を見ると、黒髪美人・戸倉ユカ(18)が、大きなメガネをして微動だにせず座っている。ヒヨ、笑顔で。

ヒヨ「そのメガネ…よく見えそうだね！私、村瀬ヒヨ。よろしくね！」

ユカ、無表情のままメガネに指を通し。

ユカ「ダテだけだね。よろしく」

ヒヨ「お、オシャレだね！」

ヒヨの左隣の空いていた席に水野アイ(18)が来て、ヒヨの鞆に付いた“はるみんな”のマスコットを見つけ。

アイ「あ！オリンピック限定はるみんな！お揃いだね！」

と、アイのリュックに付いたマスコットを見せる。ヒヨ、驚いて。

ヒヨ「本当だ！初めまして、私、村瀬ヒヨ」

アイ「ヒヨちゃんね！私は水野アイ。アイって呼んでね！」

ヒヨとアイの横で、ユカが無言でそっと自分の鞆に付いている“はるみんな”をアピール。ヒヨとアイが騒ぐ。

そこへアキと小口が入ってくる。

小口「全員起立！」

生徒一同、起立する。

アキ「みなさん。おはようございます」

生徒一同「おはようございます！」

小口「着席！」

生徒一同、着席。

アキ「みなさんは、高い競争率を勝ち抜いてきた期待の星です。これからやってくるどんな試験にも打ち勝ち、我が旅館・ホテルコースの名に恥じないよう日々努力し、頑張ってくださいね…」

アキ、横で突っ立っている小口を一括。
小口、慌てて。

小口「そ、それではまずこちらの映像をご覧ください」と、前方にセッティングされていたスクリーンを指し、瞬時に教室の電気を消し、教室の両側のカーテンを勢いよく閉める。

スクリーンには映像が写し出され、まず、テレビでも放送されている、佐々木彩華・志村すず・黒部ユリが出ていた学校CM。次に、学校紹介VTR。レストランで笑顔で接客する彩華、テーマパークで子供たちと輪になって笑顔のすず、荷物を持ちお客様を案内する笑顔のユリ。教室で見ていた生徒の表情はうっとり夢見心地。VTRが終わり瞬時にカーテンが空き電気がつき、眩しそうにする生徒一同。次の瞬間、アキ、勢いよく教壇を叩き。

アキ「あなたたちがこの3人のような輝かしい未来を手に入れられる可能性はごくわずか！各コースからそれぞれたった1名！ライバルを蹴落とし険しい山を登りつめ、過酷なサバイバルを生き抜いた者だけが手に入れられる称号“おもてなしクイーン”を指す：そう、あなたたちは今日から『おもてなしサバイバー』なのです！」

教室に雷が落ちたような衝撃。

オホホホホ！と笑うアキに震え上がる生徒たち。

ユカだけは変わらず微動だにしないが、額を汗が伝う。

小口、騒ぎの中ひとり教室の端で冷静に見渡し、名簿にチェックを入れる。

○同・【旅館・ホテルコース】教室・中

T・休憩時間

ヒヨとアイが、ユカの席に集合し。

ヒヨ「なんか、すごい所に来ちゃったね」

アイ「本当だよー、初日から撃沈」

ユカ、無表情でメガネを拭く仕草。

ヒヨ「ユカ？それレンズ入ってないんじゃないやなかったっけ？」

ユカ「そうだった」

ユカ、メガネをかけるが逆さ。

アイ「ユカ、逆だよ」

ユカ「そうね」

ユカ、無表情でメガネをかけ直す。

アイ「冷静なのか動揺してんのかどっち」

ユカ「激しく動揺してるわよ」

ヒヨ「わかりにくいな」

アイ「次は先輩の授業見学に行くんだよね？」

ユカ「そうみたいね」

ヒヨ「おもてなしサバイバーの裏側かあ…なんかワクワクしてきた！」

チャイムの音。笑顔のヒヨ。不安げなアイ。無表情のユカ。

○同・廊下

アキと小口、歩きながら。

アキ「どうだった？」

小口、名簿を見ながら。

小口「はい、私が見たところ…戸倉ユカ、くらいですかね」

アキ「京都の老舗旅館の娘だっけ？」

小口「はい、さすがに落ち着いてましたね」

アキ「他は？」

小口「…あ、戸倉の隣が例の…」

アキ「直前にプラチナで入った？」

小口「はい、村瀬ヒヨなんですけど」

アキ「けど、何？」

小口「たいしたことないですね」

アキ、食い気味に。

アキ「だろうね」

○同・【旅館・ホテルコース】実習室・前

1年生整列している。

ヒヨ、くしゃみをして。

ヒヨ「誰か私の噂してるのかな」

そこへアキと小口がやってきて。

アキ「それではこれから、先輩たちの授業を見学します」

小口「みんな邪魔にならないように静かに見学しましょう」

アキ、実習室に入っていく。

1年生、後続き、最後にユカ、ヒヨ、アイ、最後尾に小口。

○同・【旅館・ホテルコース】実習室・中

着物姿の2年生たちと黒部ユリ(16)、笑顔で迎える。

ユリ「みなさん、お疲れ様です。初日で、緊張と疲れが出たところではないでしょうか？今

日は、私たちから歓迎の気持ちを込めて、お茶を振舞わせていただきます。どうぞお

席にお座りください」

2年生が優しく誘導を始め、1年生、戸惑いながらも席についていく。

奥から別の2年生が手際よくおしぼりを配り始める。

2年生D「いらっしやいませ」

2年生E「廊下で待っていてくれたんだよね？寒くなかった？」

1年生A「ちよ、ちよっと寒かったです」

2年生B、笑いながら。

2年生D「4月とはいえ今日はちよっと寒いよね。お待たせしてごめんなさい」

1年生A「いえ！とんでもないです！」

他の席でも、おしぼりを手にして

1年生B「あったかい」

と顔をほころばせる。

2年生DとE、アイコンタクトをとり、2年生Dが奥に入っていく。

○同・【旅館・ホテルコース】実習室・裏側

ユリが指揮をとり、他の2年生たちがバタバタと和菓子を皿に乗せたり、グラスやゆのみを並べたり。

2年生D、入ってきてユリに。

2年生D「さすがユリ、やっぱりちょっと寒かったって。温かいおしぼりで正解」

ユリ「ありがと、じゃあみんな、お茶も熱いので願い」

2年生一同「了解！」

お茶担当の2年生たち、一斉にお盆の上からグラスを避け湯呑みを置き、せわしなく熱いお茶を準備。

○同・【旅館・ホテルコース】実習室・中

実習室では動きも優雅になり、慣れた手つきでお茶を振舞っていく2年生。

2年生D、笑顔でお茶を配りながら。

2年生D「この後、美味しい桜餅をお持ちいたしますね」

1年生B「やったー」

1年生C「桜餅…」

2年生D「桜餅、好きではないですか？」

1年生C「あ、すみません。私、餅アレルギーなんです」

2年生D、焦る様子もなく。

2年生D「そうなんだ。春だしご入学のお祝いに桜餅用意しちゃったの。知らなくてごめんなさいね」

1年生C「いいえ！そんなの知らなくて当然です！友達に食べてもらうから大丈夫です！

私はお茶で十分癒されたので」

2年生D「そう？お茶のおかわりも遠慮なく言ってくださいね」

笑顔で歩き去る2年生D。

ヒヨ、もぞもぞして。

ヒヨ「だめだ、さっき廊下が寒くて…ちよっとお手洗い行ってくる！」

ヒヨ、小口に言って実習室を出る。

○同・【旅館・ホテルコース】実習室・裏側

裏側に入るなりユリの所へ駆け出して。

2年生D「ユリ大変！餅アレルギーだって」

ユリ「え！？」

2年生D「どうする？」

ユリ「5大食物アレルギーはないって確認してたんだけど、餅かあ…」

2年生D「桜が苦手な子がいるかもって普通のおはぎは予備に用意してるけど、これも餅

だもんね」

2年生E「ユリ、そろそろ桜餅出さないよ」

2年生D「どうしようユリ!」

ユリ「……。どこの席の子?」

2年生D「手前の席」

ユリ「奥からできるだけだけゆっくり出して。話しながら時間稼いでもらっていい!」

2年生E「どうするの?」

ユリ「桜餅を発注した時、おまけで桜茶が付いてたよね?」

2年生E「うん、旧校舎の倉庫の冷蔵庫にあるよ」

ユリ「ホットケーキの素、あったよね?」

2年生D「うん、次の実習用にとあって…」

ユリ「それちょっと分けてもらっていい?」

2年生D「いいけど、それも同じ倉庫だよ?旧校舎まで行かないよ」

ユリ「すぐ戻るからフライパン温めて!」

ユリ、走り出す。

○同・【旅館・ホテルコース】実習室・廊下

ヒヨ、お手洗いの標識を見て。

ヒヨ「あ、あった。あっちだ」

と歩いていると、目にも止まらぬ速さで風のように何かがヒヨを追い越して行った。

ヒヨ「ん?なんだあれ?」

ヒヨ、気になるがトイレへ急ぐ。

数分後、トイレから戻る途中のヒヨ。後ろに何か気配を感じ、振り向くと、着物をまくり上げホットケーキの素や桜茶を脇に抱えたユリが弾丸のように走ってくる。

ヒヨ焦って。

ヒヨ「あわわわ…」

ユリ、秒で駆け抜ける。

○同・【旅館・ホテルコース】実習室・中

ヒヨ、席に戻って。

ヒヨ「すごい見ちゃった」

先に桜餅を食べているアイとユカ。

アイ「何?桜餅美味しいよ!」

ヒヨ「あれがサバイバー!」

アイ「え?」

ヒヨ、無言で桜餅を頬張る。

○同・【旅館・ホテルコース】実習室・裏側

ユリが駆け込んでくる。

待ち構えていた2年生D。

2年生D「ユリ、フライパン準備OK！」
2年生E「ポウルとオタマ、計量機も！」

ユリ、すぐにホットケーキを作り始める。2年生Dが見計らって桜茶を作り。2年生Eは皿をスタンバイ。

○同・【旅館・ホテルコース】実習室・中

1年生C、友達に桜餅をあげて、お茶を飲みながら微笑んでいる。
そこへ2年生Dが笑顔で来て。

2年生D「大変お待たせいたしました。こちら特製桜パンケーキと桜茶でございます」と、皿には桜茶の桜を混ぜ込んで焼き、桜の形のホットケーキにあんこが添えられている。

桜茶も程よく桜が広がって飲み頃。

1年生C、目を見開いて。

1年生C「え！すごい！ありがとうございます！超感動！」
と喜ぶ。

周りの1年生からも歓声と拍手。

2年生も笑顔。ユリもいつの間にか端にいて微笑んでいる。

ヒヨ、愛を見ながら。

ヒヨ「おそろべし、おもてなしサバイバー」

○ヒヨの家・2階・ヒヨの部屋（夜）

ヒヨ、着物の着付けを練習中。涼馬も手伝っている。そこへゆかりの弟・村瀬健水

(一七)がラジカセを持ってノックせずに入り2人を見て大阪弁で。

健水「あ、ごめんごめん取り込み中やな」

とドアを閉める。

ヒヨも大阪弁で。

ヒヨ「アホか！取り込み中やけど！その取り込み中ちゃうわ！建水も手伝って」

健水「なんやねん。俺、忙しいんやけど」

ヒヨ「何が忙しいねん」

健水「実は今な、新しいラジオ体操考えてんねん！ちょっと見てくれる？」

建水、ラジカセの再生ボタンを押し、ラジオ体操の音楽に合わせてキレッキレのダンスをする。

涼馬「…なにそれ」

建水、音を止め、息を切らしながら。

建水「世界レベルのラジオ体操。オリンピックで使われへんかなと思って」

涼馬「……」

ヒヨ「アホやねんこの子。それより続き聞いてよー。ほんま有り得へん！騙されたわあ。

ビックリすんであの姿見た瞬間！え、めっちゃ走ってるやん！めっちゃめくりあげてるやんって！リアルにおもてなしサバイバーやでヤバいわ！あれは本気やで！」

涼馬、横に座った建水に。

涼馬「お姉ちゃんの大阪弁、久しぶりだな」

健水「いやあ、これは相当やな。姉ちゃん大阪弁になる時はマジで余裕ない時やから」

涼馬「だよな」

ヒヨ「ちよっと！ちゃんと聞いて！ほんまにこれは人生の一大事なんやから！」

涼馬・健水「はい」

ヒヨ「ほんでこれも！着物30分で着るてほぼ神業やん！もう無理やー」

ヒヨ、いつの間にか体中が紐でぐるぐる巻きになっている。

○東京おもてなし専門学校・中庭

ヒヨ、ユカ、アイが3人でお弁当を食べている。ヒヨ、標準語に戻っていて。

ヒヨ「着物、何分で着れるようになった？」

アイ「私まだ40分はかかっちゃう！しかもお母さんに手伝ってもらってだよ」

ヒヨ「だよね！超難しいよね」

ユカ「そう？」

ヒヨ「え！？ユカは何分で着れるの！？」

ユカ「20分…かかるかな」

ヒヨ・アイ「えー！」

ユカ「だって、もともと着れるから」

ヒヨ「そっか！実家、旅館だっけ」

アイ「いいよねー」

ユカ「着物は慣れだよ」

ヒヨ「ね！今度着付け教えて！お願い！」

アイ「私も！」

ユカ「…いいよ」

ヒヨ「やったー！」

アイ「いつにする！？」

3人、楽しそうに話す。

○同・旧校舎2階・窓際

制服姿の誠の背中。

カーテンの影からヒヨたちを眺めている。

中庭の桜の木から、花びらがハラハラと舞う。

「#1」終わり